

論文の要約

大正・昭和戦前期の日本における航空思想の普及

大山 僚介

本論文では、①大正・昭和戦前期における帝国飛行協会（後に大日本飛行協会）・国民飛行会の活動・言説の分析を通して、航空思想がどのように普及されていたのか、②地域社会においてそれがどのように受け止められ展開したのか、を明らかにした。筆者は、石川県における軍用飛行機献納運動を事例とする民衆の戦争熱に関する研究（第一章）や先行研究を通して、「航空機への憧れや文化的イメージは、航空機を持つ軍隊の受容・支持や軍隊観の変化に関わるのではないか」という問題関心を持った。その点を探るためには、その背景にある当時の航空イメージや普及の必要性が喧伝されていた航空思想を研究する必要があると考え、本論文を執筆した。

航空イメージ・航空思想に関連する研究として、まず国防思想・防空思想の普及に関する研究があり、航空思想そのものを扱った研究も数は少ないが存在する。その中でも航空思想の定義付けを初めて行ったといえる研究として荒川章二『軍隊と地域』（青木書店、2001年）が注目される。荒川氏は、「航空思想普及とは、軍用機・空軍の役割に関する教化」であり、「全国的にみても特異な国防思想普及運動」と位置付けている。しかし筆者は、航空機の特質は新兵器でもあり文化・平和にも貢献が期待されるという両義性を持っている点にあると考えており、航空思想も両義性を持ったものとして捉え直した。また近年、なぜ民衆が軍隊を支持したのか、という問題関心を共有しながら、軍隊と地域の関係性を問う研究・軍隊の民衆的基盤を問う研究が盛んとなっている。対象・フィールドが多様化してきている段階にあるが、本論文で航空機を軸として軍隊と民衆の関係性を問うことによって、先行研究ではいまだ十分に指摘されていない民衆が軍隊を支持する新たな基盤を明らかにすることを目指した。航空イメージに関する研究もあるが、航空思想の具体的な意味内容、航空イメージの通時的変化、具体的な地域社会の動向等、未解明な部分も多く残されている。そこで本論文では、帝国飛行協会・国民飛行会という戦前の民間航空団体による活動・言説を主な分析対象として、大正・昭和戦前期において航空思想がどのように普及されたのか、またその内容の変遷を考察した。基本史料として、①帝国飛行協会・国民飛行会発行の機関誌・冊子、②新聞、③公文書を使用した。特に両会の機関誌は残存状況がよく、航空思想の変遷を一貫して捉えるには最適な素材である。また先行研究で

は地域社会の動向にほとんど関心が向けられていないが、1930年代に入ってから地方にも多くの民間飛行場が建設されており、地域社会が航空をどのように捉えていたのかという点も重要な課題である。よって本論文では、地域社会の航空に関わる動向を探るための事例として、地方における民間飛行場建設を検討した。

第一章では、満洲事変期の石川県における軍用飛行機献納運動を分析し、戦争熱の様相・そこから窺える飛行機と民衆の関係を考察した。飛行機献納運動は強制的な官製運動としての側面を持ちつつも、石川県においては一定程度の県民の自発性がみられた。また飛行機の命名式においては、特に海軍が、飛行機を利用した民間での宣伝方法をも取り入れつつ、海軍への支持を取り付けようとしていた。そして県民が飛行機献納へと向かった自発性の由来として、飛行家・飛ぶことへの憧れや飛行機を「科学の進歩」と捉える意識があったのではないかと指摘した。そして飛行機への憧れ等の意識が、飛行機を持つ軍隊の受容・支持へと繋がる側面があったのではないかと、という問題関心を提示した。

第二章では、帝国飛行協会・国民飛行会の活動・言説の分析を通して、1910～1920年代における航空思想の普及のされ方、その内容の変遷を考察した。第一次世界大戦期には、主に航空機の軍事的側面に注目する言説が多かったが、国民飛行会の機関誌では外国人飛行家に関する記事や航空機の文明上の重要性を指摘する記事も見られた。一次大戦の終結を画期として、航空イメージには大きな変化が見られ、帝国飛行協会の機関誌では、航空機の文化・平和的側面のみを強調する言説と、航空機の文化・平和的側面と国防的側面を同時に主張する言説とが併存する状況がみられた。1925～27年まで開かれた航空ディスプレイでは、航空機の文化・平和的側面と国防的側面を同時に主張する言説が継承された。そして航空ディスプレイが宇垣軍縮と同時期に行われていたことを考慮すると、航空思想の普及は、荒川章二氏のいう宇垣軍縮の新しい質の軍部支持世論開拓の試みを、三大都市を中心に推し進める世論対策として機能していたと考えることができる。そして航空思想を「文明・科学の利器である航空機を発達させることによって、国防を完全にすると共に、日本の文化・文明をも発展向上させようとする思想」と定義した。

第三章では、1933年に帝国飛行協会が発行した『航空日本の建設』で表明された事業方針、特に飛行場の建設推進という方針が、どのように登場するのかを、1920年代中盤から1930年代初頭の航空思想の変遷を跡づけながら明らかにした。1920年代中盤から1930年代初頭にかけて、航空思想の基本的な枠組みに変化はないが、満洲事変を経て国防・防空にアクセントが置かれるようになり、具体的に提示された事業方針も、国防の第二線と

しての民間航空振興のための方策として提示された。帝国飛行協会の機関誌上の飛行場をめぐる議論をみると、当初は都市発展との関連でのみ飛行場建設が捉えられていたが、満洲事変後には一変し、飛行場には都市防空の機能をも期待されるようになった。この考え方がそのまま、1933年の『航空日本の建設』にも引き継がれた。また同時期の事例として、満洲事変後の金沢における飛行場建設をめぐる議論の若干の検討を行った。

第四章では、1930年代の帝国飛行協会の航空思想の内容とその変遷を、総務理事を務めた四王天延孝の活動と当該期の冊子の主要部分を執筆した井上四郎の言説に焦点をあてて考察した。1930年代初頭の帝国飛行協会は、太平洋横断飛行計画の失敗もあって危機的な状況に陥っていたが、四王天が総務理事に就任して積極的に航空思想普及事業を行い、寄附金募集をした結果、立て直しを図ることに成功した。四王天が総務理事の期間に多くの冊子・著作の執筆を行った井上の言説は、1933年発行の『航空日本の建設』の枠組みを引き継ぎつつも、航空の問題を東西の文明史・文化史の流れのなかに位置付ける方向に発展した。日本が世界でも「特殊な」歴史・文明を持つ国であるとの優越意識から、文明史の流れのなかで日本のみが東西文明の調和を図れること、それを実現するには新たな人類文化向上の原動力である航空機を発達させなければならないことを主張した。

第五章では、地方においてどのように航空が捉えられていたのか、そして航空思想が飛行場の建設過程でどのような働きをしたのかを明らかにするため、1930年代初頭における富山飛行場の建設過程を考察した。飛行場建設の世論対策として行われた四王天延孝の講演は、基本的に1933年の『航空日本の建設』の内容と同様のものであった。県当局や商工会議所の飛行場建設の論理を分析すると、帝国飛行協会の航空思想の枠組みを継承しつつも、「満洲国」建国や鉄道建設、港湾整備、水力発電の発展など、富山県特有の状況と飛行場建設の意義が結びつけられていた。航空思想は、地方の飛行場建設推進者に対し、建設を正当化する大きな論理を提供したと評価できよう。そして実際の建設過程においては、当初は軍事的な方向へと進みつつあった運動が、飛行場建設の文化的意義を強調しつつ軍事的な意義もあることを示した「富山飛行場建設趣意書」が出されたことで、民間飛行場建設へとシフトしたことを明らかにした。ここでは航空思想が、異なる方向に進みつつあった双方の人々を納得させる論理として機能したといえる。開設後の富山飛行場は民間航空機の発着だけでなく、軍事利用もされた。それは富山県側が積極的に動いた結果であるが、県が期待した防空の拠点としての飛行場の機能は、実際の空襲では役に立たなかった。

第六章では、非公共用飛行場として建設された衣ヶ原飛行場を事例に、飛行場がどのよ

うに捉えられていたのかを考察した。飛行場の地鎮祭での祝辞を見ると、当初は国防的な観点以上に、文化・産業・社会への貢献という側面から飛行場建設が捉えられていた。また建設者の熊崎惣二郎は、当初「飛行町」建設計画を持っていた。「衣ヶ原名古屋飛行場」、つまり名古屋の飛行場として、公共用飛行場の建設を目指す動きがあり、その背景には都市計画の中での飛行場の重要性の高まりがあった。さらに名古屋飛行場の建設運動も進む中で、衣ヶ原飛行場が国際飛行場の候補地となっていると報道された時もあったが、名古屋飛行場が実際に開港されたことで、立ち消えとなった。その後 1935 年 1 月に日本防空義勇飛行隊が創設され、衣ヶ原飛行場が「防空飛行場」と位置付けられる等、目指す飛行場の方向性に大きな転換があった。その背景には、資金難や同時代の他地方での防空飛行隊設置の動きがあると思われる。町有の民間飛行機である「挙母号」も防空強化の文脈から捉えられ、次第に軍人の視察が増えていった。戦後、飛行場はなくなったものの、航空思想の普及を目的とする航空ページェントが挙母で行われ、そこでは文化・平和的な航空イメージへの大きな転換がみられた。

終章では、本論文で分析した航空思想の内容の変遷を整理し、①第一次世界大戦の終結、②1920年代半ばの航空ディスプレイ開催、③満洲事変・上海事変の勃発がそれぞれ航空思想の変容の画期となったことを指摘した。また、航空思想を踏まえた上で地方における民間飛行場建設を分析したことで、これまでの研究では明らかにされてこなかった新たな視点を提示したことを述べた。最後に今後の課題を提示した。